

お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター 第4回国際教育協力セミナー  
「国際協力『セネガルの子どもセンター設立』から学んだこと」

日時：2004年9月25日(土)13時～16時

講師：神長美津子氏(文部科学省 初等中等教育局 幼児教育課 教科調査官、国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官)

## 1. セネガルの現状

### (1) 国情

大統領の権限が強く、アフリカの国の中では、比較的国情は安定している。フランス軍と共同演習を行っていた、

### (2) 人々の生活

農村では、藁葺き屋根に土壁の住居が並んでいる。囲いの中に数十戸ほどの家が集まり、その集まりには必ず長が存在し、権限がある。住居は、台所やトイレなど機能的に分かれた部屋がいくつか建てられている。

セネガルでは牧畜が盛んで、村の通りを山羊や馬が歩いている光景が見られる。女性は一日中子どもを背負って働いており、水汲みの仕事もしている。ダカールから、500キロ程奥地の農村に入ったが、国道というが道は陥没しているところがあり、スピードを出すと怖い。インフラはあまり整備されていない、

## 2. 子どもセンターの設立に向けて

### (1) センター建設地の選定

センターの場所としてカオラックとタンバクンダの2箇所を選定した。ダカール付近にも子どもセンターはあるが、JICAの主旨は“純農村地帯で就学前児の生活全般(保健衛生・栄養・母子保健)を支援する”ことであるため、設立地としてカオラックとタンバクンダの2箇所が選定された。場所の選定の背景には、かつてJICAの支援で井戸を発掘し、その後、井戸管理委員会がうまく機能しているところを選んでいる。井戸の管理がよいということは、しっかりしたリーダーがいて共同体意識ができていているところである。



大統領がセネガル全土に子どもセンターを作って家庭教育に関わることを行うという方向を打ち出したが、日本の支援は、4箇所の子どもセンターの設立と運営に止まっている。全土での子どもセンター設立をめざすことは、大統領の手が全土に及んでいることを示しており、そのことのシンボルであるとも考えられる。

## (2)パイロット事業前の六角堂調査

既に設立している子どもセンターは全て六角形の保育室である。調査を実施すると、この保育室だけではまかないきれない。保健衛生の保健の部分があることや、母親学級の開催も視野に入れた母親の職業訓練の場でもあること等が求められる。日本が設立した子どもセンターは、就学前だけでなく多機能を持つことを示して作ったセンターである。従来の子どもセンターは全ての機能が一カ所にあり、使い勝手が悪いものである。しかし、子ども省では大統領命令なので初めは変えられないという話であった。大統領の原案を残しつつ新しいものを作る方向で進めるという方法で、日本型のセンター設立となった。

## 3. セネガルでの調査研究

### (1) 調査研究に関わる諸機関

1年間をかけて就学前の子どもたちの生活環境の調査研究を行なった。セネガルの子ども省とカウンターパートをとり、調査で明らかになった状況を見ながら支援するという形をとることになった。

セネガルは地方分権ではあるが、お金が十分に地方にも回ってきているわけではない。当初、家族子ども省のカウンターパートと JICA の調査団とで調査研究を行なった。JICA の調査団の中には、セネガルで青年海外協力隊として活躍していた人々が含まれおり、セネガルの実情はよく知っている。日本では作業管理委員会が設けられ、私は作業監理委員として、調査側の報告を受けて就学前教育という立場から何が言えるか、どんな支援できるかの助言を行なった。

### (2) 教育の状況

セネガルでの調査は3年間であった。子どもセンターの教員や保育士を養成するシステムはなく、幼稚園教員や保育士もいない状況で何をすればよいか考えなければならなかった。就学前の教育施設は394カ所あるが、その半分以上がダカールにある。就園率は平均20.4%であるが、実際に支援に入った地域の就園率は1.9%(カオラック)と2.1(タンバクンダ)であり、就学前教育については住民の意識も薄いことがうかがえる。

住民は小中学校の読み書き算をしっかりとやればよいという考えを持っている。学校教育はフランス語で行われており、フランス語を習得して良い仕事に就業することが大切だと考えられている。

学校が終わった後に子どもを預かる宗教学校があり、貧しい子どもを24時間預かってくれる宗教学校もある。しかし、こうした宗教学校の中には、福祉的なものではなく、子どもたちは町にでて物乞いを受け、それをマラブーに上納するところもある。そうした子どもたちの生活は厳しい。支援に入った地域は最悪な状況にある子どもが多い地域であった。5歳までにすこやかに成長することは人々の素朴な願いである。マラリア・伝染病で子どもが死亡するという厳しい環境で子どもは生活している。

### (3) 幼稚園の現状

#### 園児

セネガルの子どもセンターでは月数によって園児数が変化するという状況が見られた。4歳～6歳を対象としているが、実際には2、3歳～8歳の子どももいる。1つのクラスにはたくさんの子どもがいる、男女の差は見られなかった。

支援地域の家庭では、たくさんいる子どもの中で、1人くらいしか学校に通わせることができない場合がある。親は子どもにフランス語を覚えさせたいと考えている。自分は学校に通えなかったという経験もあり、子どもを通わせたいと考えている。支援地域では、イスラム教ではあるが、それぞれの種族の宗教を持っている。ある程度の女性差別はあるが、それほど強いわけではない。そのため男女の数に差が見られなかったと考えられる。家族こども省の大臣も女性であった。

子ども達は外に出ても先生のそばを離れようとしない。子どもセンターには家庭にはないものがあるので、子ども達にとって先生が示すものが新鮮である。そのため先生のことをよく見ている。知識を得る・新しいものを得るということに関して、子どもが新鮮な驚きを持っている様子が見える。

#### 園の設備

幼稚園には椅子や机が用意されているが、元々椅子や机を使うという習慣が生活の文化にない。小学校では長机が並んでいて、子ども達はそこで2、3時間勉強を続けている。窓を作ると砂埃が入ってくるため、教室は窓なしの暗い部屋になっている。

## 4. 子どもセンター設立

### (1) センターに関わる委員会

子どもセンターには園児とその両親、幼稚園教員や保育士が関わる。子どもセンターにはコミュニティの中で子どもに教えることができる人・子どもを預かれる人を育てる、人材を確保し負ければならない。

運営委員会（会計・保育料徴収・建設設備の維持管理などを担当）と管理委員会（会計監査・地域住民への報告などを担当）の2つの委員会に関わり、地域から選ばれた人が委員会で活動をした。最終的には子どもセンターを地域住民が維持することが求めら

れるため、共同体の中で自立していく組織を作ってスタートするようにした。

## (2) マイクロプロジェクト

マイクロプロジェクトでは、母親の自立援助を目指す活動を行った。保育料の支払いができるように、現金収入を得る手だてを母親に見つけてもらうためである。母親たちの活動の結果が現金収入につながるころまではなかなか至らない。現金収入を得るまでには技術面の問題もあるのではないかと考えられる。

一番貧しいところのタンバクダのサーニャのプロジェクトでは、しっかりした管理委員会があるために地域で製粉を行い、お金を集めて教員や保育士の給料を払っているところもある。そこでは、現金収入が保育に還元していている。

このようなマイクロプロジェクトの事業背景として、今までの支援は公教育中心だったが、これからの支援はインフォーマルに対する支援も重要だという考えが出てきたことが挙げられる。就学前教育施設を作っても、それが将来未永く維持管理されるためには共同体に関する組織作りも含めた生涯教育をしなければならない。そのためにはインフォーマルな教育の支援が必要なのである。そこで0～8歳までの子どもと保護者を対象とし、知的な支援と生活についての支援の両方を行って、家庭をしっかりと育て、地域をしっかりと育てていく必要がある。

## (3) 子どもセンターの場所選定・施設建設

プロジェクトそのものがセネガル全土の子どもの生活改善につながるためには、様々な共同体に子どもセンターを作ってもらいが必要があり、そのモデルを示す必要がある。そのため今回のプロジェクトは3年間で成果が実ることが必要であり、失敗はできない。

そこで、日本の井戸を10年、20年維持できている、しっかりとしたコミュニティリーダーがいる地域を選定した。小学校が隣にある場所を選定し、小学校の先生との協力や校長の支援が得られるようにした。保健省との連携もとった。

ダカールから500キロの地域を選定したので、その地域の土建業者に頼んで施設を建設した。幼児教育に対する知識が少ないので、建築家に説明をし、その建築家から業者に説明をしてもらった。2月に場所の選定をし、11月に建築が完了した。

小学校では、トイレが汚いという理由で来ない子どもが特に女兒に多いので、トイレの管理は大事なことであった。小学校は建物の外にあるため、地域に住む人々にみんなが使いに来てしまって汚くなる。そこで建物内にトイレを配置し、常に管理するようにした。

## 5. 子どもに対する意識向上

### (1) 啓蒙活動

小さい子のためにという意識なく、労働力として子どもが必要だという意識がある。

日本では当然のことが当然ではない。

そこで、カウンターパートによって地域の人に対する幼児教育の啓蒙を細かく行っていた。まず、子どもセンターの先生に話をし、小さい子どもを持つ住民や子どもはいないが手を貸してくれる人へも話をした。全ての人に幼児教育を理解してもらう機会を作る必要があった。映画を流すバスであるシネバスを利用し、映画を見た後に教育について・子どもセンターについての話を集まった人々に行った。子どもセンターを維持する運営委員会・管理委員会の設立についても紙芝居などで説明を行った。

子どもセンターに関わる保育士や運営委員に安全教育に関する話をすることも重要であった。

## (2) 地域と子どもセンター

子どもセンターは地域の人々が自分で運営し、センターに関わる人々が継続していくことが必要である。そのため、地域の人々が意欲を持つように、自分たちの建物であることを理解してもらわなければならない。

講演を受ける機会や現場を見学する機会を設けたり、マイクロプロジェクトでの指導を行ったりした。教材製作の活動も行ったが、紙があまりないので紙に書くという習慣がない様子であった。子どもと一緒に実地研修をするために、野外や室内での活動も行った。紙芝居についての研修も行った。文化財はないが、地域にはいろいろなお話があり、掘り起こせばたくさんのお話が出てくる。何をやるかの手がかりを提供することが重要である。研究授業も行った。センターのスタッフは20～30代の女性が主だが、男性もスタッフとして参加している。

## (3) 子どもセンターでの生活

保育研究の定着により、バリアフリーの入り口が作られて障害者も受け入れるという思想が見られたところもある。

カウンターパートの人間が順番に日本の幼稚園を見学に来て参考にしたようで、名簿や誕生カードなどが入り口に貼ってあった。時間割はあるが実際にやっている内容は違い、ゆったりした雰囲気の中で歌などを行っている。時間割に関しては形としてはきっかりになったということだと考えられる。年長クラスでは机と椅子を並べてフランス語や数の勉強をしていた。

壁に書いてある生き生きとした絵を見ると、本当に紙と鉛筆が必要なのかはよく考えなければならないことのように思われる。環境教育としてレタス栽培も行ってた。カセットよりも太鼓を持ち出すと生き生きと踊りだす子どもたちの姿が見られた。

母親学級ではおかゆの作り方の指導をしていた。研修は重要なことだが、いったん受け入れてから自分たちのものを創り出すには時間がかかる。保護者は関心を持っている

様子で、ボランティアで世話にくるなどの協力をしている。

#### (4) 子どもセンターの課題

子どもセンターを設立して、今後の課題は資金不足である。特に子どもセンターの先生方に支給される給料が一番の課題になっている。

支援をすることは必要だが、それは地域の人々が自立できるような支援でなければならない。国の政策としては、子どもセンターを1万箇所作る予定。しかし、地方の州の州知事に話が入っているわけではない。情報はきていても資金は回ってきていないという状態である。国の政策の実現には地方の協力が必要だということを説明しなければならない。子どもセンターの法律はまだできていないため、予算の配分もされない。子どもセンターをバックアップしてくれる法的な整備を急ぐことが必要である。

役人の人材育成についても課題がある。家族子ども省は省庁としてまだ小さい。ここで実力を発揮すると、他の省に移ってしまい、優秀な人材が家族子ども省に残れないという現状がある。

### 6. 子どもセンターの成果

#### (1) 地域の人々へのインタビュー

子どもセンター設立後、地域の人々へのインタビューを行った。

子どもをセンターに通わせている親からは、子どもの社会性が身に付いたという回答が得られた。子どもへの接し方の変化についても回答をしており、子どもを注意深く見るようになり、子どもに対する理解が向上したと述べている。また、母親の自由な時間ができたという回答も得られ、教育というよりも託児の機能の素晴らしさを感じているようである。教員・保育士・委員会への感謝の念を持つという回答も見られた。



教員や保育士からは、今までは働く機会がなかったので、センターで働くことにより、満足感や自信、自覚を持つようになったという回答が得られた。

運営委員会からはオーナーシップの確立ができたことについての回答が得られた。地域社会からは子どもセンター設立による地域の結束の強化や女性のエンパワーについての回答が得られ、子

どもを通わせていない人からも高評価が得られた。

子どもたちからは子どもセンターの先生になりたいという回答が得られた。しつけの習得ができるようになったという回答も得られた。

## (2) 子どもセンターを成功させるために

今回の子どもセンター設立が成功した要因を分析し、他にも広げる形を取る必要がある。子どもセンターが成功するためには、教育・福祉・保健の面からの子どもの生活全般の改善が必要である。コミュニティリーダーを育成し、オーナーシップを持つ組織を作ることも重要である。限られたお金の中でやっていくためには、設立する地域で人材を発掘し活性化していくことも必要になってくる。

そして、支援の限界と役割を理解しなければならない。現地にある素材の中からの教材の発掘し、現地の人々に選択してもらうということが重要である。

## 7. 日本がすべきこと

日本は教育のモデルを示し、日本の教育のそのままではなく、そのエキスが何かを考えて伝えていくことが大切である。それを現地の人々自身が解釈できなければ支援はできない。

ダカール宣言の後、学校教育にいくら費やしても識字率があがらず、女性に対する教育支援が必要になっていることから、フォーマル教育だけではなくノンフォーマル教育もあわせて取り組むことが重要だと考えられるようになった。ノンフォーマル教育と学校教育が連携を取りながら支え合うことが大事なのである。

セネガルは日本の様々な支援をもらいたいと考えている。子どもセンターの原案は、ダカール宣言後に出された。支援を求めた結果、台湾とユニセフの子どもセンターがダカール近辺にできている。台湾はアフリカに対しても非常に熱心に支援し、セネガルでも子どもセンターを作っているが、建設するだけでその後はコミュニティまかせという場合が多い。ソフト面の支援がないために実際に開園していないところもある。数を増やすのではなく、成功例やモデルを作って生活環境を改善して全土的なレベルアップをはかることが重要である。教育、とくにノンフォーマル教育はソフト面の開発も同時にしなければならない。

JICA はソフト面の開発を行うということで依頼を受けている。調査団がセミナーを開発するとステアリングコミッティを呼んで説明をする。ユニセフがお金を提供し、日本で開発したスタッフ研修の中で必要なプログラムを提供していくという方法で各国の横のつながりを作るなどが実施された。

## 8. 質疑応答

### (1) オーナーシップをもてる仕組みを根付かせるための手がかり:

その国や住民の声を聞きながら、支援をしていく必要がある。支援をしていて実際に伝わっていくものは一部分である。情報を提供して相手が動くのを待ち、伝わったことから次の支援を考える。吸収したものについてとやかくいわず、なぜ受け入れられたかを考えることが大事ではないか。お金を出すんだから全部やらしてもらわなければならないのは支援

ではない。遅々たる取組かもしれないが、自分たちの村は、自分たちでつくるという意識を大切に育てたい。

**(2) 運営委員会・管理委員会についてセネガル特有の工夫：**

運営委員会は実質的なものであり、管理運営委員会は地域が母体となっている。管理運営委員会が全部を決めていく。かつての井戸管理委員会の組織をそのままあてはめてみた。自分たちで修理・管理しないとやっていけない（部品などが調達しにくい）ので、人材を確保することが大切もなってくる。全ての種族・言語・年齢から委員会の人間を選ぶ必要があり、争いがないように、しっかりとした人間を選ぶようにしている。このようなきめ細かい配慮は必要である。

**(3) 子どもセンターで用いられる言語：**

種族語を使っているが、絵本などでフランス語に接することができる。時間割はフランス語で書かれている。

小学校はフランス語である。様々な議論はあったが、フランス語を持ち込んでしまうと母親が参加できなくなる。ただし、小学校教育につながる形にするために、種族語にしておいて、間にフランス語にふれる機会をつくっている。

**(4) インタビューで挙げられた「社会性」の中身：**

いやがらないで行けるということが社会性の中身だと考えられる。実際見ている友達同士が仲良くしている感じはなく、みんなで先生を見ている。外に出ても大人の人と話している。社会性とは、集団の中に入っても物怖じしないこと、先生に物が言えること、そして家庭から離れても一人で生活ができることを指すと考えられている。

**(5) 幼稚園と子どもセンターの関係：**

これから作らなければならない状況で今は微妙な関係であると言える。幼稚園は教育省が管轄しているのに対して、子どもセンターは家族子ども省が管轄している。家族子ども省は予算を引いてくることができないので、教育省・保健省から予算を引いてくることになる。子どもセンターを幼稚園のようにするにはお金がない。そこで地域の中で人材育成をして先生にする必要がある。そこで養成機関を作ることも課題になってくる。幼稚園自体を増やすという考えは国にも州にもない。私立幼稚園はクリスチャンで、貧しい子どもを24時間預かる宿泊施設がある。私立幼稚園は都市部の人のお金で運営されている。公立幼稚園もお金があまり出ていない。私立の幼稚園の中はヨーロッパの幼稚園の雰囲気教材が揃っていた。公立の幼稚園の先生の孫は子どもセンターに通っておりその先生いわく、子どもセンターのプログラムは良いと評価している。



**(6) 国全体としての方針:**

外国からの支援で、どうにか建物はできつつあるが、国全体としてはまだ子どもセンターをどう運営していくかの方針はできていない。この次の段階では、法律整備が求められている。他の子どもセンター合同で研修をするようにはなった。

センターに研修所を作ってセンターで実習させる構想があるが、まだ JICA で支援する方向はできていない。子どもセンターを支える仕組みが必要だが、次の支援についてはまだ始まっていない。

**(7) 子どもセンターでの母親教育:**

研修は、教師と保育士が共に行っている。保健婦を兼ねた保育士が、母親学級でやっていた。お粥の作り方や下痢を防ぐ方法など、生活に必要な情報を適切に指導している。実際につくって見せてもいる。限られた情報だが保育士はよく勉強している。地域の子供を持つ母親が集まってきたが、よく聞いている。

**(8) 保育時間: 午前中の時間だけである。**

**(9) 関係する省庁について:**

教育省だけの発想だと地域には受け入れられず、必要な機関にならない。就学前教育だけでは成り立たない。家庭を支える機能をもたないとなかなか地域に根付かない。ノンフォーマル教育が中央の行政に根付かなければならない。きっちりと根付くためには、子どもセンターを支える人材を育成することが大事である。価値観の一致、中央の政府にノンフォーマル教育のリーダーが存在することが大事である。学校の先生・教育省との連携も必要である。



JICA は幼児教育、発達を支えるというところで援助が必要だということだが、実際に園を開所すると親のニーズは識字教育ということですれがある。確かにノンフォーマル教育は底がない。

**(10) JICA と幼児教育について:**

世界的な流れとして幼児教育に力を入れている。世界銀行・イギリスのリフィット・アジア開発銀行もそうである。しかし義務教育ではないので援助が数字であらわれない。住民参加が必須条件になり、地域社会での啓蒙活動・H I V 教育など全てが網羅されているので手探りの状態である。ヨーロッパは力を注いでいて、JICA もやろうということになっ

た。

**(11) 子どもセンターの教員・保育士の人選とサラリー:**

教員も保育士も地域の人から選び、中学校卒業程度。2, 3ヶ月研修を受けて、教員や保育士になっている。サラリーは、公立幼稚園と比べても少ないが、やる気をもって、場所によっては、収穫を待ってサラリーを支払うところもある。コミュニティーがそれまで支えているので現金がなくても生活できているようだ。

**(12) 人材育成を目的とした養成講座について:**

スタッフ研修は事前に1ヶ月ほどで追加研修もしている。運営してみないと何が必要かわからない。呼びかけて集まってもらう。24時間の宿泊研修という形で行っている。子どもセンターを拠点にして研修をする構想はあるが、センターに周りの人が集まれるような場所を作らなければならない(旅費がかかって遠くには行けない)。今はJICAが負担しているが、お金がなくなってからどうなるかはまだ分からない。

**(13) 日本への研修で役に立っている点:**

幼児教育を支える仕組みには興味を持っていて参考にしている。子どもがみんな遊んでいてにこにこしている様子を見て、本国もそうしたいと思うと話されていた。日本にくると理解できるし、見てきたことは印象深く残っている。例えば日本の国は土足ではあがらない。それが保健衛生に重要で本国ではそれが問題なのかもしれないと気づく。何をどう受け止めるかは驚くこともあるが、その人が関心を持って見て帰るものは必要と感じているものがあふ。「子どもにはしっかり教えていかねばならない」「子どもは働かせたい」という考え方から、改めて幼児期の発達を知り、幼児期を発見をすることによって、カルチャーショックを受けたようである。そのカルチャーショックから何かを感じ、考えていただくことも大切なことではないか。幼児教育の実際を見ていただくことが、何よりも研修となっているのではないのでしょうか。

**(14) 援助の区切りの付け方:**

セネガルに2回訪問したが、子どもセンターでは、また新しい人たちが活躍していた。次世代が出てくる姿を見ることで安心した。支援の必要有無は、JICAの支援は国の施策なので、個人的な見解より大きな立場から決まると思う。